


 書評

安永浩著

精神科医のものの考え方

私の臨床経験から

融 道男

本書は、1992 年に発刊された安永浩著作集全 4 巻から漏れていた若干の論稿や、専門的でないエッセイ類も含み、自身の内面もよく反映していると、序文にある。まず安永氏特有な独創的な精神病理学の理論についての章のほか、に、数学界(第 3 章)、国際会議基調講演(第 8 章)、対談(第 16 章)、随想(第 10 章)など色とりどりの内容・形式になっている。精神医学以外の分野にもわたり、さまざまな方面で役立つと思われるが、特に氏のやや難しい理論が具体的に、あるいは違った角度からわかるようになっている。

「あとがき」に追記された【緊急情報】は、安永氏が最も影響された O. S. Wauchope のニュースである。Wauchope 氏の消息は、1959 年時から「ウォーコップ氏行方不明」となっていたが、本書の最終校正を終えた朝に、ロンドンの Wauchope 氏親族から「彼は 1957 年にケニアで癌のために死んだ」とメールを受けたのである。【8.O. S.ウォーコップの次世代への寄与(2001)】は、個人的回想から始めている。安永氏は、医学部学生の際に、Wauchope の「ものの考え方—合理性への逸脱」(深瀬基寛訳)を読み、一種の「解放感」を得た。「いささか神経質」だった青年にとってその解放感は、かなりのものだったという。しかし、Wauchope の影響は彼の内面で眠り続けた。そして精神科医の経験を積んで、schizophrenia の「了解し難さ」の難問に直面して、9 年後に Wauchope の書に示された哲学に目覚めたのである。その論理から「パターン」を取り上げ、ファントム空間論を仮説として発表した。schizophrenia 患者が表象空間を錯覚し、「パターン逆転」して、憑依のような形を呈することなどがこの章に解説されている。

【10. 夏・随想—中心気質幻想】は、興味深い個人的な経験が書かれている。中心気質も、安永氏が発見した概念である。「中心気質」は「躁うつ気質」「分裂気質」と並んで、人間の気質を三分する大領域である。中心気質とは、類てんかん気質を含めるが、広く拡大された概念である。何人にも、のびのびと発達した 5~8 歳ぐらいの『子供』らしい部分を、かなりはつきりと保存している中心気質の構造がある。安永氏が個人的経験として語るには、自宅を改築する決断をしなければならない時期に、ある集まりでたまたまそれが話題になった。一人がまことにやわらかな笑顔で、「それはいいですねエ……」とうなずくように言われたが、その一言が、迷いや心配をウソのように解いてくれる「癒す力」を持っていた。安永氏は、中心気質者ではないが、中心気質の構造は何人の基底にもあり、微妙な条件、タイミングがあり、極めて純度の高い「中心気質的交流」によって、癒されたのであろう。彼の経験からは、精神療法の芽吹きが感じられる。

本書には、精神療法に関する章がふんだんに収載され、それらの論稿から学ぶことは多い。用いられている比喻もわかりやすく、安永氏の言葉に共感することもある。【1. 精神療法総論の諸問題】、【6. 分裂病について患者と家族にどう話すか】、【11. “失敗” をめぐって】、【13. 『家族』寸感】などのほかに、哲学、本質、解釈と言語などの章があるので、精神科の臨床医だけでなく、精神療法に関心を持つ方々にも、本書は、その技法を読みとる良書となろう。

(東京医科歯科大学名誉教授)

● A5 232頁 2002 本体3,400円 金剛出版刊